

文字の世界

古代は、行政文書によって管理された社会といえます。文字は、情報を伝える役目をするとともに、文字を書くことは、有力者のあかしともなります。また、時に文字は呪術的なものとしても観念されていました。ここでは、鹿田遺跡から出土した文字や、それを記したと思われる人びとに関連する資料をもとに、鹿田遺跡の性格の一端に迫ってみましょう。

墨書土器・木簡

鹿田遺跡より出土した文字が書かれた古代の品は、当時の遺構が分布する地点に点在しています。これらの文字は、墨書土器や木簡のかたちで、井戸と河道から出土したものです。墨書土器は11点、木簡は2点が出土しています。

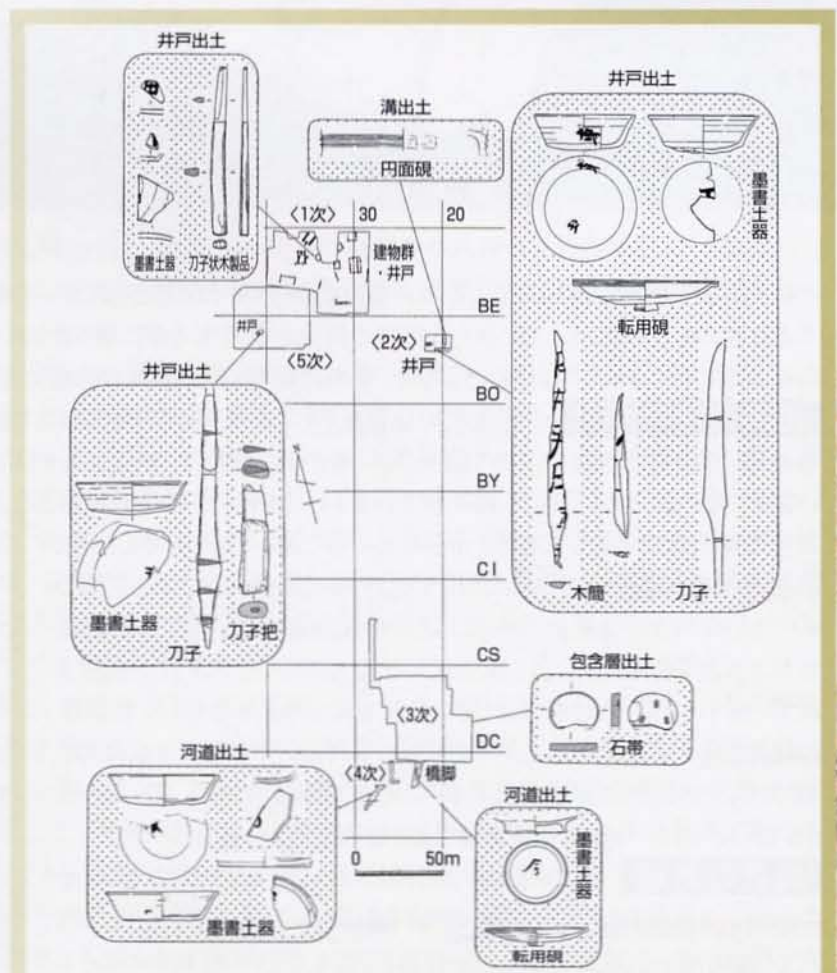
出土した文字には、「田」（第1次調査）や、「専」と「玉」（第2次調査）のように判読できるものもありますが、多くは断片的で何が記されているのかよくわかりません。

鹿田遺跡の性格を示す可能性があるものとして、「田」の文字が挙げられます（写真）。これは、丹塗り土師器の内側底面に書かれたものです。ただし断片的であるため、一文字で完結するのかどうかはわかりません。とはいえこれが、建物が集まる鹿田集落の中心的地点の、傑出した規模を誇る井戸から出土したことには、相応の意味があるかもしれません。なお少し時期は下りますが、鹿田遺跡に近接し、関連が注目されている新道遺跡では、平安時代末頃の井戸から、荘園を表す「庄」という文字のある木簡が出土しています。鹿田遺跡一帯の性格を書き記した資料が、考古学と文献史学との連携の中で、今後も明らかになるでしょう。

少し異なる角度から文字にアプローチしてみましょう。文字が記された土器の部位について注目しましょう。鹿田遺跡における内訳は、底部の外側7点、底部の内側2点、側面2点、蓋の外側1点となり、数量の面では底部の外側がもっとも一般的な文字を記す部位となります。記述部位ごとの分布をみると、先に注目した第1次調査地点の大型の井戸から、鹿田遺跡の中では珍しい底部内面や蓋外側に記した墨書が出土するのに対し、一般的な底部外側の資料は周辺地点から広く出土しています。記述部位に関する分布の差は、大型の井戸と建物群が検出された第1次調査地点と、他の地点との性格の違いと関連しているのかもしれません。



「田」と書かれた墨書土器（第1次調査）



鹿田遺跡から出土した文字・文房具類・石帯

文房具

文字を書くにあたっての必需品は、硯や刀子といった文房具類です。鉄製の刀子は、井戸の中から2点が出土しています。その刃には、砥ぎ直しによって細く磨り減っている状況もみられます。これらの刀子は、木簡に書いた文字を削り取るために使われたものかもしれません。

硯については、^{えんめんけん}円面硯1点と^{てんようけん}転用硯2点が出土しています。前者は硯としての独自の形をもつものであるのに対し、後者は須恵器の蓋を転用したものです。両者の出土地点をみてみましょう。まず円面硯は、第2次調査地点の中世溝の中に紛れ込んで出土しました。一方、転用硯は、同調査地点の井戸と、キャンパス南辺の河道から出土しています。一般的に集落の中心部には円面硯が分布し、周辺部に転用硯が分布することがこれまでの研究で明らかにされていますが、鹿田遺跡における硯の分布にも集落内の機能のちがいが表れているのかもしれません。今後、集落の中心と考えられる第1次調査地点周辺において、円面硯が出土する可能性もあるでしょう。



石帯(第3次調査、長さ3.9cm、幅4.1cm)

石帯

文字を記した人びとの地位を示すと思われる品も、鹿田遺跡から出土しています。古代には、腰に巻くベルトの飾りの質によって身分が表現されました。鹿田遺跡からは、^{せきたい}石帯と呼ばれる石で作られた帯飾りの部品が出土しています。この石帯は、一般に六位以下の下級役人クラスが用いたものといわれています。こうした石帯を身につけた人物が文書の作成を行い、鹿田集落の経営にたずさわっていたのでしょう。(光本 順)

史料からみた鹿田庄

^{びぜんのかにしかたのしょう}備前国鹿田庄は、鹿田遺跡とその一帯に広がっていたと考えられている荘園です。鹿田庄は、藤原氏宗家が代々所有する荘園(殿下渡領)として、新たな摂政や関白が就任する際に譲り渡されていたと記録されています。また他にも関連史料が豊富にのこされています。ここでは、史料に記された平安時代の鹿田庄について考えてみましょう。

位置はどこか? ^{びぜんのかにかみつまちぐんこうやのしょう}鹿田庄の位置を示した平安時代の史料はありませんが、14世紀代の「備前国上道郡荒野庄領地図」が参考となります。この絵図には「鹿田河」の西岸に人家らしきものが描かれ、そこに「市」、「鹿田庄」と記されています。その南には「児嶋」も描かれています。「鹿田河」は今の旭川と考えられており、鹿田庄の中心は旭川下流西側、現在の岡山市鹿田町、二日市、十日市の一帯にあったものと考えられます。また、1413年(応永20)の東大寺文書には「鹿田庄大庄也」と記されており、旭川下流西側一帯を占めていた荘園であったことがうかがえます。さらに、江戸時代後期の1721年(享保6)に作成された『備陽記』には、鹿田庄の比定地として十八ヶ村が記録されています。右上の地図には、そこに記された地名を参考に、鹿田庄の範囲を考えてみました。ただ、これらの史料はいずれも中世以降のもので、古代の鹿田庄が成立当初からこのような広がりを有していたかどうかについては、今後の発掘調査による成果が待たれるところです。

成立の時期 鹿田庄の成立時期についてははっきりとはわかりません。ただ、817年(弘仁8)に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」(鹿田庄からの小作料)であてたという記録がのこっています。このことから、少なくとも平安時代初期には、藤原氏が鹿田の土





海上交通どのかかわり 998年(長徳4)、鹿田庄梶取(水運業者)佐伯吉永は鹿田庄別当(管理者)に船を借り、秋篠寺の依頼を受け美作国の年貢米を都へ運ぼうとしたところ、摂津国武庫郡(今の兵庫県尼崎市付近)の小港で船が難破してしまい、その際に賊に船と米を盗られてしまいました。この事件を吉永自身が検非違使(当時の警察・裁判権をもった役人)に訴えた書状が今ものこっています。ここで注目できることは、秋篠寺という他の寺社荘園の年貢運搬に鹿田庄別当の船が使用され、その梶取も鹿田庄の人であったことです。おそらく、鹿田庄に水運業をなりわいとするような人々がいたと考えられます。また、九州と近畿を結ぶ海上航路の中間点、そして備前国を南北に流れる旭川の河口という鹿田庄の地理的な位置をあわせて考えると、鹿田庄が単に年貢を出す荘園ではなく、瀬戸内海や旭川を媒介とした流通網の中心として機能していたようです。

(高田 貴太)

中世の鹿田遺跡

古代以後、村の様子はどのようなのでしょうか。実は10世紀に入ると人々の生活痕跡は急速に失われてしまいます。そして、再び姿を現すのは中世的な特徴を見せる11世紀に入ってからです。その間、どこに行ってしまうのか。近年、鹿田キャンパスの西方で10世紀の集落跡が調査されており、今後の成果に期待が寄せられます。

では、改めて鹿田遺跡での生活が再開される11世紀以降、中世の状況を簡単に紹介しておきましょう。古代と比較してみると、ムラの移り変わりが見えてきます。

集落の様子

屋敷地の出現

鹿田遺跡では11世紀以降、14世紀に向けて居住域を拡大し、岡大の鹿田キャンパス全域に生活の跡を残しています。遺跡の中央部という限られた範囲に建物や井戸が集中する古代とは随分と景観が変わっています。もう一つの大きな変化は、大小の溝が造られている点です。特に、13～14世紀には縦横に走る大形の溝によって区画された屋敷地が姿を現します。溝に区画された内側には建物と井戸が配置され、墓を伴う場合も見受けられます。また、何もない空間が確認される場所もあり、庭あるいは畑のような利用も窺うことができます。整った家並みをもつ村の姿を彷彿させます。

建物 は、繰り返し建てられているために具体的な形を確認することは困難ですが、全体的な規模は古代に比べるとやや小形で、柱の並びも不規則な傾向があり、貧弱な建物の印象があります。一方で、瓦が点々と出土していることから、一部を瓦葺きにした建物があったことも窺われます。瓦葺きの建物は、当時は寺などの特殊な役割を持っていることが多いようです。鹿田遺跡で出土した木簡の中には般若心経の一部が書かれたものや銅椀が出土しています。銅椀は仏具としての使用が一般的で、これらの遺物からも「寺」のような宗教的な場・建物の存在が浮かび上がってきます。

井戸 は、内部に組み合わせの木枠や曲物が頻繁に使用され、上面の形は円形に加えて方形が増加しています。古代のように大形のものは影を潜め、底面付近や上層の限られた位置に、食器や木器がおかれたり、米や麦などの植物あるいは牛や馬といった動物の骨が納められることもあります。食器の種類は椀・皿といった日常雑器が多く、特に、古い段階では小皿が特徴的です。いわゆる「かわらけ」です。木器では、箸・下駄・曲物・扇など多様な種類が含まれます。その他に、呪い札が入っていたり、焼土や炭が大量に埋まっており、火を使用した跡をはっきりととどめることもあります。かなり入念な「まつり」が執り行われていたのでしょう。こうした儀礼には、当時の民間信仰の影響が窺うことができます。

古代の井戸と比べてみてください。古代では、かなり限られた祭祀具が使用されているのに対して、その種類や埋め方が変わっていることがわかります。



屋敷地の様子(第6次調査、北より)

人々の暮らしぶり

「うつわ」 — 遠隔地からの品々 —

その内容は多様性に富んでおり、盛んな経済活動、商品流通を示しています。海外からは、中国産の白磁・青磁・褐釉の碗・皿類、国内では東海地域から愛知産の常滑焼きの甕、近畿では楠葉産や和泉産の瓦器、東播地域（兵庫県）からはすり鉢など、九州からは滑石製の石鍋、さらに近隣では、備前焼きの甕・壺・すり鉢・碗、亀山焼き（備中）の甕など、様々な品（下写真）が鹿田遺跡に入っており、文献史料・絵図にある「市」の様子を彷彿させます。

これらの中には、周辺の遺跡でも一般的に見られるもののほかに、出土地が限られるものも含まれています。石鍋や楠葉産の瓦器もその一つです。石鍋の出土遺跡は、寺院や官衙関連の遺跡あるいは流通の中心となる遺跡が多く、また、「楠葉」は「鹿田庄」とともに藤原摂関家の代表的荘園の一つに挙げられている「楠葉牧」にあたります。こうした遺物は鹿田遺跡の性格を考える上で大変参考になります。

「文字」どの関わり 文字はどの程度、人々の生活に係わっているのでしょうか。文字に結びつく資料は、土器や木の札などに書かれたものがあります。土器では、碗の裏側などに墨書が見られますが、数はけっして多くありません。また残念ながら解読できるものもわずかで、「酒」「十」などが数少ない例です。出土点数は古代と比べて増えているわけではなく、総遺物量との比率を考えると逆に低下しています。人びとの身近かにさほど普及していないのかもしれませんが。

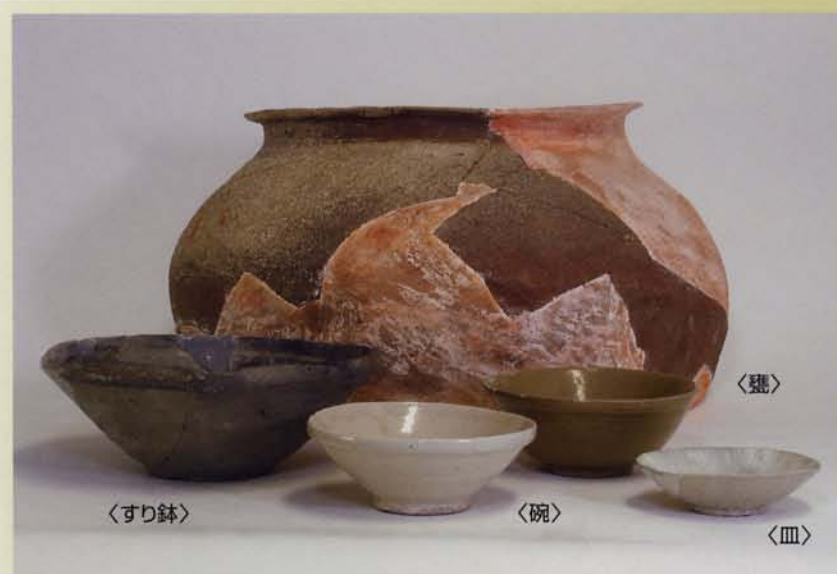
一方、木簡では、般若心経の一部が書かれた杭状のもの、あるいは「鬼鬼…」とかかれたような呪符（下写真）などが目に付きます。これらは、何らかの「まつり」に際して書かれたことは明らかです。人々の生活（信仰）に結びついたものでしょう。

このように、古代と比べると、鹿田遺跡の中では文字との関わり方は少し変わってきていると言えます。

「文献史料」は語る 中世の史料としては、前述した「鹿田」「市」の文字が描かれた絵図がよく知られていますが、その他に、15世紀頃までは藤原氏の荘園として「鹿田庄」は継続している記録があります。ただし、その直接的支配は在地の有力者にわたっており、最終的には松田氏が居を構え、名実ともに鹿田庄は姿を消していくことになります。

考古資料からも、集落の継続は15世紀にかかる頃までかろうじて残される程度で、その後は耕作地へと変化し、長きにわたったムラも終焉をむかえるのです。

（山本 悦世）



写真上：中世のうつわ（13～14世紀）
常滑焼の甕
魚住窯（東播地域）のすり鉢
白磁・青磁の碗・皿

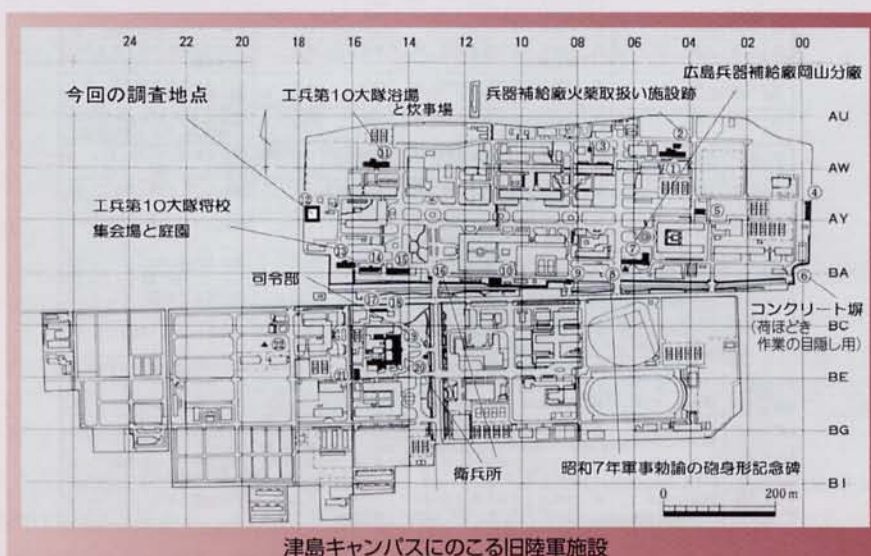


写真右：木簡（呪い札）…「鬼」の字が読み取れる。

最近の調査成果から

旧陸軍工兵第10大隊橋梁施設演習場跡の測量調査成果

岡山大学津島キャンパスの敷地は、1908年に造営された旧陸軍の駐屯地を引き継いだもので、現在も旧陸軍時代の建物や構築物がのこっています(右図)。そのうち、文・法・経済学部1号館西の焼却場脇にのこる赤レンガ造りの構築物は、「橋梁爆破演習用」の橋梁模型と考えられてきました。近年、遺構の痛みが激しくなったため、7月5日～13日に測量調査を行いました。その結果、橋梁を架設するための橋台と橋脚を確認できました。年代はおそらく大正末～昭和初め頃で、今回の調査から、爆破に関係する施設ではない可能性が強くなりました。



津島キャンパスにのこる旧陸軍施設

橋台と橋脚

橋台は原位置をとどめていました(写真1)。長さ8m、高さ1.1mの壁体を築き、その背後を盛土によって支える構造です。壁体の上部にはL字状の段を設けており、この部分にトラスト(橋の骨組み)を設置していたと考えられます。

橋脚は橋台から南に5～6m離れた位置で2基確認できました。2基とも柱状の橋脚で、上部には側面から見て凸状の段を設けています。おそらく、橋台からのびるトラストを橋脚の片方の段に設置し、反対側の段に南側へのびるトラストをかけていたようです。また、橋脚の最上面には2カ所の鉄製ボルトが確認でき、トラストの固定や橋脚移動時の吊りあげなどの用途を考えることができます(写真2)。

刻印レンガ

橋脚と橋台に用いられたレンガには、松葉を二本組み合わせた菱形状の刻印が多数確認できました(写真4)。これは、「讃岐煉瓦株式会社」で製造されたレンガと考えられます。

※調査時には多くの方々にご見学いただき、橋梁施設に関する多くの情報を提供していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

(高田 貫太)

編集後記

今回は鹿田特集でした。「鹿田庄」解明に向けての第一歩として、今後につなげていく予定です。次回をご期待下さい。

(山本 悦世)



写真1 橋台・橋脚の全景(南から)

写真2 橋脚のボルト



写真3 橋台側面と橋脚(西から)

写真4 レンガの刻印(下:菱形の中に「サ」)